慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	英国におけるニュー・レフトとcultural studiesの関係についての一考察：メディア研究としてのcultural studiesの捉え直しに向けて
Sub Title	A study of the relationship between the New Left and the"cultural studies"in Britain reconsidering the media studies in "cultural studies"
Author	飯塚, 浩一(Iizuka, Koichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1997
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.2 (1997.) ,p.77- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19970000-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

英国におけるニュー・レフトとCultural Studiesの関係についての一考察
メディア研究としてのCultural Studiesの捉え直しに向けて
A Study of the relationship between the New Left and the "Cultural Studies" in Britain
Reconsidering the Media Studies in "Cultural Studies"

飯塚 浩一

1．Cultural Studies／カルチュラル・スタディーズ

近年、「カルチュラル・スタディーズ」(Cultural Studies)という名称で呼ばれる研究が様々な研究領域で紹介され、一種の＜ブーム＞とさえ呼べるような状況を呈している[1)]。ローレンス・グロスバーグ（Lawrence Grossberg）、キャリー・ネルソン(Cary Nelson) 及びポーラ・A・トレクラー(Paula A. Treichler)によれば、その領域は「マルクス主義からフェミニズム、精神分析、ポスト構造主義、ポストモダニズムにまで及」び（Grossberg, Nelson & Treichler 1992 [93頁]）、「インター・ディシプリン的でトランス・ディシプリン的な、時には対抗ディシプリン的な分野であり、広義には人類学的な、そしてより狭義には人文科学的な文化概念の双方を包括しようとする緊張の中ではたらく分野である」(Grossberg, Nelson & Treichler 1992 ［95頁］）と定義されている。

この「カルチュラル・スタディーズ」が日本に紹介された時期は、大きく二つの時期に分けられる。まず1980年代に、バーミンガム大学現代文化研究所（Centre for Contemporary Cultural Studies, University of Birmingham)で主に実施されていた研究が、特にスチュアート・ホール(Stuart Hall) の研究を中心に、マス・コミュニケーション研究の新しい傾向、という形で紹介された[2)]。さらに1990年代になると、ポストコロニアリズムや差異の政治学としての側面が強調されるようになった[3)]。

本稿の目的は、今日「カルチュラル・スタディーズ」という名を冠して論議されている研究を手掛かりとして、「人間にとってのメディアの役割に対する思想史的アプローチ」（メディア思想史）を構築するための予備的考察を行う事である。よって本稿で対象となるのは、1980年代に日本に導入・紹介され、それ以後研究が進められてきた「マス・コミュニケーション研究」としての「カルチュラル・スタディーズ」の側面である。（ここで一つ断っておく事項がある。本稿では、議論を進める上での便宜上、「カルチュラル・スタディーズ」という用語を、Cultural Studiesを「マス・コミュニケーション研究」として捉えた場合の表記として扱い、それ以外の場合はCultural Studiesと表記することする。）

ここで筆者が着目するのは、一般的には「文化の研究」を意味しているCultural Studiesが、なぜ「マス・コミュニケーション研究」の一つとして捉え得るのか、あるい

三田社会学(Mita Journal of Sociology)第2号:77～88頁

はそうした捉え方でCultural Studiesの本来の問題意識とアプローチを捉え切れるのか、という問題である。例えば、Cultural Studiesの中で用いられている「マス・コミュニケーション」という用語の用いられ方は、これまでの「マス・コミュニケーション研究」における用いられ方と同じでよいのだろうか。こうした問題は、何のために日本の研究者が英国で展開されたCultural Studiesを導入・研究するのかを考える際に重要であろう。

そこで本稿では、まず日本でどのように「マス・コミュニケーション研究」として「カルチュラル・スタディーズ」が捉えられてきたのかを整理し、次に、Cultural Studiesの問題意識とアプローチが形成されたと考えられる1950年代末から1970年代前半にかけてのレイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)、エドワード・P・トムスン(Edward P.Thomson)、リチャード・ホガート(Richard Hoggart)そしてスチュアート・ホールの問題意識とアプローチを検討することで、「マス・コミュニケーション研究」とは異なるメディアに関する研究としてのCultural Studiesの可能性を探ることにしたい。

2．マス・コミュニケーション研究としての「カルチュラル・スタディーズ」

ダニエル・J・チトローム（Daniel J. Czitrom）は、米国流の経験主義的マス・コミュニケーション研究の根底にある精神的前提について、次のように述べている。

> 1930年の末までに、アクティヴな経験主義的精神は、それの持つ新しくてますます洗練された調査技法を強調しながら、米国における近代的コミュニケーションの研究を特徴づけていた。……メディア及びそのオーディエンスに関する経験主義的研究ーそれは観察、実験、仮説を検証するための帰納法に依存しているーは、一般的に、この分野の開拓者たちによって1940年前後に定式化された一つのフレーズによって導かれてきたのである。すなわち「誰が何を誰に言ったのか、そしてそれはどんな効果を持っていたか？」というフレーズである(Czitrom 1982, p.122)[4]。

日本では戦後、米国流の経験主義的マス・コミュニケーション研究が主流を占めてきており、当然、その精神的前提は上述の内容を共有していたと言ってよいであろう[5]。これに対し、1980年代になると、第1章で述べたように英国のバーミンガム大学現代文化研究所を中心に展開されていた研究が、特にメディアの「受け手研究」という枠組みで紹介された。これは社会心理学的な枠組みで行われていたマス・コミュニケーション研究に対して、記号論的思考を入れた分析として盛んに論じられることになった[6]。例えば藤田真文は、『新聞学評論』（現・『マス・コミュニケーション研究』）第35号（1986）に掲載した論文において、バーミンガム大学現代文化研究所のメンバーが実施しているメディア研究の特徴は「メディアのメッセージのイデオロギー性を記号論的に暴露していく点にある」と指摘し、次のように紹介している[7]。

イギリスのバーミンガム大学「現代文化研究センター」(The Centre for Contemporary Cultural Studies 以下「センター」と略記）において、新たなマルクス主義的マス・メディア研究が進行しており、アメリカの実証主義的なマス・メディア研究に替わるオルタナティブなパラダイムとして注目され始めている。しかし、彼らの研究の展開を、マス・メディア研究における従来のマルクス主義的アプローチと同じカテゴリーに単純にくくることはできない。何故なら、彼らの依拠しているマルクス主義の認識論は、戦後のマルクス主義理論における重大な転機、すなわち、正統的なマルクス解釈に対するネオ・マルクス主義者からの徹底的な認識論的批判を反映したものだからである（藤田1986, 1頁）。

藤田の紹介に示されるように、おおむね「カルチュラル・スタディーズ」は、英国のマルクス主義的マス・コミュニケーション研究の新たな傾向という形で紹介された。具体的には、ミッチェル・ギルヴィッチ(Michael Gurevitch)、ジェイムズ・カラン(James Curran)そしてスチュアート・ホールらによる紹介論文に沿って紹介する、いう形をとる場合が多かった[8)]。

例えば岡田直之は、マス・コミュニケーション研究には三つの主要な知的パラダイム、すなわち1.大衆社会論的パラダイム、2.行動主義的パラダイム、3.マルクス主義的パラダイム、が存在するとしている。このうちマルクス主義的パラダイムはマス・メディアのイデオロギー機能を認識の焦点とするとしつつ、カランやホールの説明に従って1.構造主義的研究、2.政治経済学的研究、3.文化主義的研究、の三つのアプローチが最近見られるとし、このうちの文化主義的研究が、英国の「カルチュラル・スタディーズ」の伝統を継承しつつ、マルクス主義と構造主義との理論的統合を目ざすアプローチである、と主張している（岡田 1983）[9)]。

また佐藤毅は、マスコミ効果論を主たる研究対象とし、アメリカを中心に展開してきた「行動科学的、経験主義的、多元主義的」な特徴を持つマス・コミュニケーション研究を「経験学派」(empirical school)と呼び、それに対して1970年代に入ってヨーロッパを中心に台頭してきた新しい研究動向として「批判学派」(critical school)があると指摘している。佐藤はその区別として、E・ロジャース(E. Rogers)による次の区別に従うとしている（佐藤 1986）。

コミュニケーション研究の経験学派は量的な経験主義、機能主義、実証主義によって一般的に特徴づけられる。この学派はコミュニケーションが取り囲まれている広範な文脈にあまり注目しないで、コミュニケーションの直接的な効果を研究するという傾向をもっていた。これにたいして、批判学派の真髄はより哲学的なところに力点を

おき、コミュニケーションの広範な社会構造的文脈に焦点をあて、マルクス主義的志向をもち（すべての批判的研究者がマルクス主義者というわけではないが）、コミュニケーション・システムを誰が統制しているのかという問題に中心的な関心をおくものである。批判的研究者はコミュニケーションの理論が社会の理論と切り離せないものであると信じており、したがって、その分析の視野は経験学派のそれよりも広い（Rogers 1985, p.219)[10]。

そしてこうした区分の仕方は、他にも行政管理学派(administrative school) と批判学派、行動科学的研究(behavioral research) と批判学派、自由主義的－多元主義的見解(liberal-pluralist view)とマルクス主義的見解、アメリカ的アプローチとヨーロッパ的アプローチのような呼ばれ方もしていると指摘している（佐藤 1986）[11]。

彼によれば経験学派はアメリカを中心として発展し、今日でもマスコミ研究の伝統的主流を占めている。批判学派はフランクフルト学派から派生してきた部分もあるが、1960年代半ば以後、マルクス主義への関心の復活という波によって台頭し、また記号論、構造主義、社会言語学、現代の「カルチュラル・スタディーズ」などの交流に刺激されて起きてきたものだと言える。そして1970年代に入ってヨーロッパ、特にイギリスを中心としてマスコミ研究の批判学派が台頭してきたとして、岡田と同様、カランらの分類に従ってそのアプローチを三つに分類している（佐藤 1984）。

このように、「カルチュラル・スタディーズ」という名称で紹介されたメディアに関わる研究は、これまでのところ、日本のマス・コミュニケーション研究の主流となっている米国流の経験主義的アプローチに対する代替的アプローチとしての位置付けが与えられてきたと言える。つまり、既存のマス・コミュニケーション研究の問題意識と方法を形成する枠組みを組み替えるというより、むしろ既存のマス・コミュニケーション研究における一つの新しい理論的傾向として、あるいは既存のマス・コミュニケーション理論を＜補強する＞ものとして「カルチュラル・スタディーズ」を受け入れようとしてきたのである[12]。しかしながら、他方、「カルチュラル・スタディーズ」に従事する（してきた）人々の活動を見てみれば、それは既存の学問体系の枠組みにとらわれず、むしろそうした枠組みを＜破壊していく＞研究・運動であることが見てとれる。すなわち、「カルチュラル・スタディーズ」という名称が意味している「文化の研究」がなぜマス・コミュニケーション研究になるのか、という疑問が正面から取り上げられることは少なかったのである[13]。

そこで次に、Cultural Studies の創始者と目されている人々－レイモンド・ウィリアムズ、エドワード・P・トムスン、リチャード・ホガート、スチュアート・ホールーの問題意識とアプローチの仕方について検討することにしたい。

3．ニュー・レフトの思想家とメディアへの関心

英国でCultural Studiesが文字通りの「文化の研究」から、ある一定の研究成果から成る「歴史」を持った研究動向としてまとめあげられるきっかけとなったのは、リチャード・ホガートによるバーミンガム大学現代文化研究所の創設であった。初代所長を務めたホガートの後を1969年に継いだスチュアート・ホールは、その後十年間所長を務め、その間に発表された彼自身及び研究所のメンバーによる様々なプロジェクトの成果が、日本における「カルチュラル・スタディーズ」ブームを引き起こしたのである。

しかしながら、研究所における非常に幅広い分野にわたるプロジェクトをCultural Studiesの名の下で行うことを可能にした基本的な問題意識と分析視角を形成した人物の中に、先に挙げたホガートとホールの他に、レイモンド・ウィリアムズとエドワード・P・トムスンが含まれることには異論の余地はないであろう。具体的には、ウィリアムズの『文化と社会』(Williams 1958)と『長い革命』(Williams 1961)、トムスンの『英国労働者階級の形成』(Thomson 1963)、ホガートの『読み書き能力の効用』(Hoggart1958)といった代表的な著作が、その後の研究所の問題意識とアプローチの方向性の基礎を形作ったと考えられる。

この四人に共通するのは、思想運動によって左翼を再生し、社会主義への英国の道を開こうと試みた、「ニュー・レフト」(New Left)の思想家であった点である。ニュー・レフトとは、一般的には1950年代中頃から形成された、英国や仏国における社会主義運動の一潮流を指すことが多いが、特に英国では、1956年のスターリン批判、スエズ侵略、ハンガリー動乱を機に起こった新たな社会主義の思想運動を意味している。具体的には『ニュー・リーズナー』(New Reasoner)誌と『ユニバーシティーズ・アンド・レフト・レビュー』(Universities and Left Review)誌が合併して1960年から発行された『ニュー・レフト・レビュー』(New Left Review)誌を中心に活躍した人々のことである。水田洋によれば、ニュー・レフトの思想家たちは「スターリン的な社会主義体制、イギリス的な福祉国家体制、またそれ自身体制化してしまった反体制組織としての共産党－これら一切の既成体制（エスタブリッシュメント）にたいして、人間と思想の自由と尊厳を要求」（水田1961, 16頁）したのであり、政治運動や政党運動とは別に、思想運動を展開したのである[14)]。

先に挙げた四人は、いずれもこの『ニュー・レフト・レビュー』誌の編集者や代表的な寄稿者であり、当時の英国の体制と既成左翼の双方に対する批判を展開した。例えばトムスンは、ニュー・レフトの論文集『新しい左翼－政治的無関心からの脱出－』(Out of Apathy 1960)に収録された論文の中で、「現代イギリス社会にも、1880年代や1930年代の社会に劣らず、憤激の種は山ほどもある」にもかかわらず、「憤激の直截な表現がこれほどまでにも乏しいのは何故か。労働党が、ますます原則的な人気とりに堕していくというのに、選挙では大衆の人気をますます失ってきたのは何故か。労働運動の伝統的諸制度が、老朽化や官僚制化という問題で頭を抱えているのは何故なのか」という問題を提出し、その答として「政治的無関心」(apathy)を挙げている(Thomson 1960, p.4 [8頁])。そしてそ

の無関心は「（正統的な労働運動の既成権威をも含めて）既成権威が意のままに操るメディアが、絶え間なしに、ゲームのしきたりこそ大切と主張し、その埒外に踏みだそうとする者を一人残らず嘲笑し孤立させ無視しようとして、一言でいえば、公衆を無関心の中に沈みこませようとして、じゅんじゅんと説ききかせるために全力を揮う」ことによって起こっていると指摘するのである(Thomson 1960［13頁］)。

ホールは、こうした「政治的無関心」を誘い出しているのが「繁栄の神話」(myth of prosperity) であると主張している。彼はメディアが提供する「繁栄の神話」を次のように描写する。

> ……。ある高さの天井より上は、熟練労働者は新聞やマス・メディアによって提供される、豊富の神話を通じて、間接に富を経験できるだけである。そして、こうした間接経験はますます「繁栄」の国イギリスの文化に不可欠の構成要素となってきている。……。彼と彼の妻とが、会社の重役連とともに、キュナード会社の豪華船でリヴィエラの休日や一等船客の世界に踏み入るのは、ウィリアム・ヒッキィの欄や『ミラー』紙の、けばけばしく装った女性の写真などの新聞の世界だけのことである。……。新聞とマス・メディアは（警戒を怠るといつでも）われわれの住んでいる社会についての意識を形成する。それは、継続的にこれらの夢を養い育て、しきりにドーチェスター・ホテルの豪華な生活への窓を開き、ジャマイカの海岸にのらくらしている成功の英雄たちの姿をちらりとのぞかせてくれるのだ。繁栄の神話は、その頂点に成功物語中の大人物を必要とする。そしてその人物と自分とを同一化することによって働く人々は二番煎じの成功の味を味わうのだ(Hall 1960［82－83頁］)。

すなわち「労働運動は、資本主義的な価値序列の体系を「動かしがたいもの」として受け取り、経済の不均衡と発作、驚くべきコントラストの社会に適応することを覚えて、その枠組の中で運動する羽目に陥ってしまった。」(Hall 1960, p.70［71頁］）その結果、労働者はあたかも繁栄の中に生活しているかのような幻想を抱くことになったという訳である。しかしながら、彼によれば労働者階級の繁栄は、たとえそれが純粋に繁栄といえるものではなく、「しばしば広告書きの文章屋によってたいていは誇大にいわれているものであるとしても、やはり、それは事実として存在している」のであって、その事実を「働く人々の経験の中に深く喰い入ってしまっている」状態にしているのがメディアだという訳である(Hall 1960［80頁］)。

4．メディア研究としての Cultural Studies

メディアに関して上述のような問題意識を抱いていたニュー・レフトの思想家たちは、メディアやコミュニケーションに関わる問題に対してどのようなアプローチを試みたので

あろうか。

例えばレイモンド・ウィリアムズは、彼の著書『コミュニケーション』(Williams,1966)の中で、まず「コミュニケーション」を「思想、情報、態度などが伝えられ、受けとられる諸組織・機構や形式のこと」(Williams 1996［17頁］)と定義した上で、社会に中心的な問題を権力と支配、及び財産・生産・商業という形で捉える政治的アプローチと経済的アプローチに加えて、「社会とはコミュニケーションのひとつの形式であり、これによって経験が表現され、分け与えられ、変形され、保持される」(Williams 1966［18頁］)という捉え方を重視すべきだと主張している[15)]。

こうした問題の捉え方をよく示す例として、ジェイムズ・W・ケアリー(James W. Carey)が興味深い報告をしている。1973年の秋、「コミュニケーション研究の将来」(TheFuture of Communications Studies)と題した会議がロンドンで開催された。その席上、レイモンド・ウィリアムズは「コミュニケーションの研究は「マス・コミュニケーション」の研究という名称で呼ばれるようになった事で、恐ろしく歪んだものになった」と発言した。その後、引き続いて行われた討論で、当時バーミンガム大学現代文化研究所の所長を務めていたスチュアート・ホールは、彼が率いる研究所の名称が考案された時、彼らの仕事を表す名称としてコミュニケーションの研究を含む多くのタイトルが候補に上ったが、最終的に選ばれたのは、コミュニケーションよりも現代文化のための研究所、という名称であったと発言した(Carey 1979, p.410)。

ウィリアムズとホールは、当時その会議に出席していたアメリカの研究者たちにはほとんど理解できないような問題関心を表明したのである。アメリカの研究者たちは、「コミュニケーション」や「マス・コミュニケーション」という用語を使用することこそが、この研究領域の性格を最も良く示すと考えていたからである。

ウィリアムズは、学部や研究グループ、会議の名称として「マス・コミュニケーション」という用語を使う事を忘れるべきだ、と主張した。「マス・コミュニケーション」の語は次の三つの理由で問題を引き起こすというのである。第一に、この用語は、実際には常に考慮されるべき話しことばや書きことばからなる大きな共通の領域があるにもかかわらず、研究対象を放送、映画、そして大衆文芸といった特別な領域に限ってしまう、というのである。第二の理由として、「マス」(mass)という語はその本質的な意味ではなく、最も一般的な「マス・オーディエンス」というような言葉で用いられるような意味でしか捉えられず、現代に特有のコミュニケーション状況や、ある特定のコミュニケーションが行われる場合の慣習や形式の分析を妨げてしまう、というのである。第三の理由は、オーディエンスが「マス」として認識されることで、問われる価値のある問題が、映画やテレビや書籍が、人々に影響を与えたり堕落させたりするのかどうか、あるいはそれはどのように行うのか、という問いに限られてしまう、というのである(Carey 1979, pp.410-411)。

ウィリアムズが指摘しているのは、マス・コミュニケーション研究はある重要な点を見

落としている、ということである。その重要な点とは、「コミュニケーション」は第一に、実践（practices)、慣習(conventions)、形式(forms)が組み合わさって成り立っているのであるが、マス・コミュニケーション研究ではこれらの現象は既成事実として研究対象とされていない、という点であり、第二に、マス・コミュニケーション研究はマス・メディアに注目する一方、話すことや書くことに関わる実践や慣習や形式に対する注意を除外し、必然的にコミュニケーションの理解を歪めている、という点である(Carey1989, p.41; Williams 1974)。

ホールの指摘もまた、ウィリアムズの問題意識と同様なものであったと言えよう。ホールは「コミュニケーション」という用語が研究対象をマス・メディアによって生産されたものに限ってしまう、と考えていたのである。それ故コミュニケーション研究は、一般的に、一方で文芸作品や芸術作品の研究から切り離され、他方、宗教、会話、スポーツなどの日常生活に見られる表現形式や儀式の形式から切り離される。これに対して「文化」という用語は、文化人類学的な意味で我々を生活様式全般の研究へと向かわせるのである(Carey 1989, pp.41-42)。

このように、ウィリアムズとホールが想定している「コミュニケーション」の用語の意味は、アメリカ流の経験主義的マス・コミュニケーション研究が想定しているそれとは根本的に異なる部分があると言えよう。ケアリーによれば、アメリカ流のそれが「制御を目的として離れた場所にメッセージを伝達するプロセス」であるのに対し、「共有された文化が創造され、修正され、変容するプロセス」として捉えられているのである(Carey1989, pp.42-43)。

ホールが所長を務めたバーミンガム大学現代文化研究所の設立者で初代所長リチャード・ホガートは、研究所の基本視角を「文芸作品に対する社会文化的・社会学的アプローチ」(socio-cultural and sociological approaches to leterature)と表現している。彼はこのアプローチについて、「文化」を「伝統的な意味での芸術と同様、あらゆる形式の制度、儀式、身振りの中に表現されている、社会における生活様式全般、信念、態度、気分」と定義した上で、英国の「文芸批評」(literal criticism)の伝統の中で批評家たちによって取られてきた方法を、英国の現代文化の分析に応用したものだ、と説明している(Hoggart 1970, pp.154-156)。

文芸批評とは、ホガートによれば「良い文芸作品は社会をよく理解するための鍵と、その社会における「道徳的生活」をよりよく評価するための方法を提供する」という前提に立ち、文芸作品自体の分析を通じて、その時代の英国文化を分析しようとするものである[16]。すなわち、文芸作品にはその作品が書かれた時代の英国社会の「価値」が反映されているのであり、その「価値」を、例えばある作品の中で用いられているある言葉の用法（強調、繰り返し、省略など）の分析を通じて描き出そうとするのである(Hoggart 1970, p.156)。

1950年代の後半にこの文芸批評の持つ基本的問題意識－英国社会に関する道徳的批判－を受け入れ、それを当時の英国の労働者階級の生活の質に関する問題の分析に適用したのが、前章で挙げたニュー・レフトの思想家たちであった。彼らは「繁栄の神話」を作り上げている要因を文芸作品のみならず大衆文芸、新聞、映画、ポピュラー音楽などの中に見いだしていこうと試みたのである。この試みを受け継いだバーミンガム大学現代文化研究所では、1960年代後半から1970年代の前半にかけて、A・グラムシ(A. Gramsi)、L・アルチュセール、N・プーランツァス(N. Poulantzas) らの理論的業績を取り入れ、研究方法の理論的整備が行われた[17]。この作業で得られた成果をもとに、様々な研究領域との連携を図っていったのであり、その成果の一つが1980年代前半に日本に紹介されたホールの「批判的パラダイム」だったのである。

今日「カルチュラル・スタディーズ」という名称のもとで議論されている諸研究のうち、特にメディアやコミュニケーションの問題に関わる研究は、マス・コミュニケーション研究の「受け手」研究という側面ばかりが注目され、そうした研究がなぜ「文化の研究」という名称で呼ばれ続けているのかという点は、ほとんど疑問視されてこなかったのである。今後は、Cultural Studies の創始者たちが残したメディアやコミュニケーションに関わる問題についての研究成果を再評価することが、筆者が目的としている「人間にとってのメディアの役割に対する思想史的アプローチ」の構築を進めるための課題となるであろう。

注

1) 「カルチュラル・スタディーズ」とは何なのか、それが提起している問題や方法はどのような意義を持つのか、といったことについては、例えば、『思想』1996年1月号や『現代思想』1996年3月号で特集が組まれ、活発な議論が展開されている。そこでは伝統的な意味での学問の<ディシプリン>という考え方ではとうてい捉え切れない、多様な領域にまたがる、それでいて単に「学際的」とも言い切れない議論が展開されている。また、「カルチュラル・スタディーズ」は、アメリカでも大変な注目を浴びており「アメリカにおけるコミュニケーション及びメディア研究の領域での最も強力な理論上の突破」という評価をする研究者もいる(Hardt 1992,Preface and acknowledgments)。

なお、英国における Cultural Studies の展開過程については、例えば、Turner(1990) を参照。

2) 例えば、「カルチュラル・スタディーズ」の中心的人物として日本の研究者に評価されることが多いスチュアート・ホールは、今日の先進国社会におけるマス・メディアの機能について、マス・メディアは経験主義的なマス・コミュニケーション研究が考える様な、単に社会に存在しているコンセンサスをそのまま表明する機関でもなければ、これまでマルクス主義的マス・コミュニケーション研究が考えていた様な、支配階級の意志をそのまま伝える機関でもない。マス・メディアは国家から制度的に自律しつつも、特定の人々（支配階級）の利害にかかわる問題を、あたかもすべての人々の利害にかかわる問題であるかの様に表明することによって、結果的にコンセンサスを生み出すのだ、としてマス・メディアのイデオロギー的機能を分析していくことが必要だと主張している(Hall 1982)。

3) 「カルチュラル・スタディーズ」の日本への導入・紹介の経緯については、例えば、姜・成田・吉見（1996, 62～65頁）の中の吉見の説明を参照。

4) この他、例えばリチャード・W・ブッド(Richard W. Budd) とブレント・D・ルーベン(Brent D. Ruben) は、マス・コミュニケーション研究の現状に対して次のように指摘している。－「これらすべての活動の中に潜むミステリーは、約四〇年間に渡って調査や著作が積み重ねられ、〔その内容の〕正確さが増してきたにもかかわらず、マス・コミュニケーションの過程と効果について我々が知っていることは、ハロルド・ラスウェルが＜情報源－メッセージ－チャンネル－受け手＞という基本的なモデルを提示した時に既に分かっていたことなのである。実際、五十五年以上前にウォルター・リップマンの『世論』（研究のための仮説としては未だに十分に利用されていない）が示したことが、おそらく現在のところ最も包括的かつ統合されたマス・コミュニケーションについての理解であろう。マス・コミュニケーションの調査・研究における過去の歴史は、実質的には、現在と同じ状態だったのである。（特に異なる点と言えば、おそらく、調査方法が洗練され複雑になってきたということである。）」(Budd & Ruben 1988, p.4)。

5) 戦後のマス・コミュニケーション研究の流れに関して、岡田直之は次のように要約している。－「これまでのマスコミ研究の歴史的潮流を、巨視的に展望するならば、大衆社会論的マスコミ論から実証主義的マスコミ研究への流れとして総括できるであろう。あらためて指摘するまでもなく、大衆社会論的マスコミ論は、一九三〇年代から四〇年代にかけてのマスコミ研究の高揚期に、その問題意識とオリエンテーションの形成に巨大な影響力をふるい、一九五〇年代前半にいたるマスコミ研究において主導的役割をはたした。一方、実証主義的マスコミ研究は、この大衆社会論的マスコミ論をいわば否定的媒介項にして、問題意識と研究方法の自己形成をおこない、大衆社会論的マスコミ論と真っ向から対決し、それに致命的打撃をあたえ、大衆社会論的マスコミ論に取って代わって、今日のマスコミ研究の主流となっている、と一般に考えられている。」（岡田1977, 160 頁）さらに、1960年代半ばから70年代以降、E・ノエレーノイマン(E.Noelle-Neumann) の主張に代表されるような「パワフル・メディア」論の再来が唱えられ、以前の限定効果モデルがあまりにもマス・メディアの力を過小評価していたとして、大衆社会論的考察とクラッパーの定式の見直しがなされるようになった（岡田1977a, 118頁; 1977b, 42～43頁）。

6) ちょうどこの頃から、それまで「文化研究」と表記されることが多かった Cultural Studies が、「カルチュラル・スタディーズ」と表記されるようになった。

7) この他、藤田（1988）も参照。

8) Hall(1980a; 1980b; 1982)、Curran et al(1982)、を参照。

9) 岡田（1984）も参照。

10) 訳は佐藤（1986）から引用した。

11) また、Blumler(1978) も参照。

12) Cultural Studiesのこうした捉え方に対して批判的な考察を加えたものとして、例えば、飯塚（1987; 1993）を参照。

13) 小笠原博毅によれば「「カルチュラル・スタディーズ」という呼称は独自に体系化された理論を意味するものでも、特殊な方法論に則った一つの学派を意味するものでもなく、内部に幾つもの矛盾をはらんだ論争的な言説である」にもかかわらず、メディアにおけるテキスト表現の主体分析ばかりが取り上げられる傾向があった（小笠原 1996,7頁）。

14) 英国のニュー・レフトの思想と方法について、『ニュー・レフト・レビュー』誌に掲載された論文を集めて翻訳したものとして、田村（1962a; 1962b）がある。

15) ウィリアムズのメディア、コミュニケーション、文化等の概念の用い方については、Williams(1976; 1981)も参照。

16) 次に引用するホガートの解説を参照－「英国における文芸作品の伝統は－特に都市化、産業化、民主化が始まってから二世紀の間－その時代・その社会に関する諸問題との直接的かつ明瞭な結びつきについて、はっきりした記録を持ち続けてきている。その結びつきは、創造的な作家たちや批評家たち、あるいはそ

の両方を兼ねる人々によって維持されてきている。」(Hoggart 1970, pp.155-156)

17) 理論的整備に関する一連の作業については、Hall(1980)、藤田 (1986, 1988) を参照。

文献

Blumler, J. G., 1978, "Purpose of Mass Communication Reserach: A Transatlantic Perspective", *Journalism Quarterly*, Summer.

Budd, Richard W. & Ruben, Brent D., 1988, *Beyond Media: New Approaches to MassCommunication*, Transaction Publishers.

Carey, James W., 1979, "Mass Communication Research and Cultural Studies: an American view",pp.409-425 in James Curran, Michael Gurevitch & Janet Woolacott(eds.), *Mass Communication and Society*, Sage Publications.

————, 1989, *Communication As Culture: Essays on Media and Society*, Unwin Hyman.

Curran, James et al, 1982,"The Study of the Media: Theoretical Approaches", in M.Gurevich, T.Bennett,J.Curran & J.Woolacott (eds.), *Culture, Society and the Media*, Methuen.

Czitrom, Daniel J., 1982, *Media and the American Mind: from Morse to McLuhan*, University of North Carolina Press.

藤田真文 1986 「カルチュラル・スタディ派におけるメディア論とネオ・マルクス主義的社会構成体論との関連性」『新聞学評論』35 : 1-11 頁。

————1988 「「読み手」の発見－批判学派における理論展開」『新聞学評論』37: 67-82 頁。

Grossberg, Lawrence, Nelson, Cary & Treichler, Paula A., 1992, "Preface", *Cultural Studies: An Introduction in Cultural Studies*, Routledge. ［浜邦彦訳「カルチュラル・スタディーズとは何か」『現代思想』24-3 : 91-115 頁、1996］

Hardt, Hanno, 1992, *Critical Communication Studies: Communication, History and Theory in America*, Routledge.

Hall, Stuart, 1960, "The Supply of Demand", in N.Birnbaum (ed.), *Out of Apathy*, New Left Books. ［福田歓一・河合秀和・前田康博訳「需要の供給」E・P・トムスン編『新しい左翼－政治的無関心からの脱出－』岩波書店、1963］

————,1980a, "Cultural Studies: Two Paradigms", *Media, Culture and Society*, 2-1.

————, 1980b, "Cultural Studies and the Centre: some problematics and problems", in S.Hall et al.(eds.), *Culture, Media, Language, Working papers in Cultural Studies, 1972-79*, Hutchinson.

————, 1982,"The rediscovery of 'ideology': return of the repressed in media studies", in M.Gurevich, T.Bennett, J.Curran & J.Woolacott (eds.),*Culture, Society and the Media*, Methuen.

Hoggart, Richard, 1958, *The Uses of Literacy*, Oxford University Press. ［香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社、1974］

————, 1970, "Contemporary Cultural Studies: An Approach to the Study of Literature and Society", pp.154-171 in M. Bradbury & D. Palmer (eds,), *Contemporary Criticism*, Edward Arnold.

飯塚浩一 1987 「「批判的コミュニケーション研究」における「批判」の意味」『慶應義塾大学新聞研究所年報』29: 77-90 頁。

———— 1993 "Reconsidering the undestanding of the "cultural studies" in Japanese media studies" 『東海大学紀要文学部』59: 27-37 頁。

姜尚中・成田龍一・吉見俊哉 1996 「カルチュラル・スタディーズへの招待」『現代思想』24-3 : 62-90頁。

水田洋 1961 「イギリスの新左翼」『朝日ジャーナル』7月23日。

小笠原博毅 1996 「訳者解題」（＜インタヴュー＞スチュアート・ホール「あるディアスポラ的知識人の形成」小笠原博毅訳、の解題）『思想』1996年 1月号。

岡田直之 1977a「マスコミ研究史ノートー大衆社会論的マスコミ論と実証主義的マスコミ研究」『新聞学評論』26。（岡田直之『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会、1992、に所収）
――― 1977b「転換期に立つマスコミ研究ー影響研究への視点の組みかえについてー」『新聞研究』33。
――― 1983「マス・コミュニケーション研究における3つの知的パラダイム」成城大学大学院文学研究科『コミュニケーション紀要』1。（岡田直之『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会、1992、に所収）
――― 1984「マス・コミュニケーション研究の展開と現況ーマス・メディアの効果・影響をめぐってー」『放送学研究』34。（岡田直之『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会、1992、に所収）
Rogers, E.M., 1985,"The Empirical and the Critical Schools of Communication Research", in E.M.Rogers and F.Balle (eds.), *The Media Revolution in America and Western Europe*, II, Ablex Publishing Corporation.
佐藤毅 1984「イギリスにおけるマス・コミュニケーション研究」『放送学研究』34。
――1986「マスコミ研究における経験学派と批判学派」『一橋論叢』95-4。（佐藤毅『マスコミの受容理論　言説の異化媒介的変換』法政大学出版局、1990、に所収）
田村進編 1962a『現代革命へのアプローチ ニュー・レフトの思想と方法 その1』合同出版社。
――編 1962b『文化革新のヴィジョン ニュー・レフトの思想と方法 その2』合同出版社。
Thomson, Edward P., 1960, "At the Point of Decay", in N.Birnbaum (ed.), *Out of Apathy*, New Left Books.［福田歓一・河合秀和・前田康博訳「頽廃の地点にたって」E・P・トムスン編『新しい左翼ー政治的無関心からの脱出ー』岩波書店、1963］
――――――, 1963, *The Making of the English Working Class*, Vintage.
Turner, Graeme, 1990, *British Cultural Studies: An Introduction*, Unwin Hyman.
Williams, Raymond, 1958, *Culture and Society 1780-1950*, Chatto and Windus.［若松繁信・長谷川光昭訳『文化と社会』ミネルヴァ書房、1968］
――――――, 1961, *The Long Revolution*, Penguin.［若松繁信・妹尾剛光・谷川光昭訳『長い革命』ミネルヴァ書房、1983］
――――――,1966, *Communications*, Chatto & Windus.［立原宏要訳『コミュニケーション』合同出版、1969］
――――――,1974, "Communications As Cultural Science", *Journal of Communication*, Summer.
――――――,1976, *Keywords: A vocabulary of culture andsociety*, Oxford Univrsity Press.［岡崎康一訳『キイワード辞典』晶文社、1980］
――――――, 1981, *Culture*, Fontana Paperbacks.［小池民男訳『文化とは』晶文社、1985］

（いいづか　こういち　東海大学文学部）